

樹木医になって感じる 故郷への感謝と“第二の原風景”にかける想い

アゴラ造園 株式会社 村田 千尋

東京練馬を中心に、都市緑地の管理運営に携わるとともに、それらを活用した自然環境教育活動を行って10年余り。諸先輩方や同期の方々のおかげで、樹木医として現場に立たせていただいています。業務の中で日々実感するのは、都市の樹木は人間に嫌われたら生きていくことができないということ。「(遠くの自然は好きだけど)自宅隣の公園の木は邪魔」「落ち葉が迷惑だから、木を切って」等の声を聞くことも少なくありません。同区の人口は増え続けており、緑地と宅地の距離は良くも悪くも年々近くなっています。都市の豊かなみどり環境を残していくためには、地域住民のみどりへの理解と愛情が不可欠だと考えています。

その典型的な例のひとつにサクラの木があります。場所によっては、花の時期しか愛されず、毛虫や落葉の発生を理由に強剪定が行われることも少なくありません。再生しようと芽吹いたそばから切られ、腐朽していく個体を目にする、本当に悲しい気持ちになります。それと同時に、自分自身の原風景の中にサクラがあったことを実感するようになりました。

私の故郷は、新潟県上越市(旧高田市)。小さな城下町ですが、高田城址公園の観桜会は全国から観光バスが集まります。雪に閉ざされた長い冬が終わり、高田平野の雪が解け始めると、街の色がどんどん明るくなっていき、そしてサクラが咲くと、一気に街全体が色づきます。街に住む人々の心も同じです。私も幼い頃から、お花見の時期が来るのが本当に楽しみでした。実家が公園のすぐ近くにあったため、毎日のように通っていました。ただ、花期が過ぎても、一年を通してサクラの木の存在は地域の中心にあったように思います。夏が来ると、アメリカシロヒトリ防除の薬剤散布が大々的に行われ、街中が、白く濛々とした煙に包まれましたし、秋の紅葉

の中心はモミジではなく、赤、橙、黄色とさまざまな色彩を見せるサクラの木でした。落ち葉から香るクマリンの芳香は、秋の深まりを感じさせてくれました。小学校の授業でも、公園を活用した環境教育授業が活発に行われており、自然観察絵日記には、季節ごとのサクラの姿が登場しました。その時には意識せず行っていた事柄が、今の私を創っているのだと実感し、原風景となる故郷への思いと、現在、生活・子育てを行っている地“第二の原風景”を大切に後世に残していきたいという思いを強くしています。

とはいえ、業務の中では自分の力のなさを痛感し、情けなくなることも多々。その中で、敬愛する先輩の“百年先を思い描く”という言葉に出会いました。すぐに結果が出なくとも、今の自分にできることを精一杯しようと思い、地域のみどり、樹木を愛する次世代を育てる「森のようちえん」を始めました。ここでの森とは地域の緑地のこと。身近な公園や屋敷森等を指しています。子どもたち、子育て世代のお母さんお父さんたちに、身近な樹木について知ってもらい、興味関心・愛着を持ってもらうことを目的とした週末イベントです。

きっと、皆さんもそれぞれ、樹木医となった背景や思い、信念等をお持ちのことと思います。それらを大切に、時には仲間と共有し合い、全国の皆様と高め合っていけたらと思っています。

写真 今年、故郷で開かれる「2018 全国さくらシンポジウム in 上越」

2018年4月12・13日
高田公園(新潟県史跡城跡公園・約4,000本のサクラ)

